Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-11

糸賀一雄『ミットレーベン 故郷・鳥取での最期の講義』（1968 講義／2014 発行）を読み解く ： 糸賀一雄研究(2)(要旨)

渡部，昭男
國本，真吾
冨永，健太郎

(Citation)
日本特殊教育学会第53回大会(2015宮城大会) 自主シンポジウム29 糸賀一雄『ミットレーベン 故郷・鳥取での最期の講義』（1968 講義／2014 発行）を読み解く ： 糸賀一雄研究(2)

(Issue Date)
2015-09-19

(Resource Type)
conference object

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90006472

日本特殊教育学会第 53 回大会（東北大学）2015.9.19 自主シンポジウム 29　15:40-17:40　C301

糸賀一雄『ミットレーベン　故郷・鳥取での最期の講義』（1968 講義／2014 発行）を読み解く—糸賀一雄研究(2)—

企　画　者：渡部　昭男（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）
司　　会：渡部　昭男（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）
話題提供者：國本　真吾（鳥取短期大学幼児教育保育学科）
冨永健太郎（日本社会事業大学社会福祉学部）

KEY WORDS：ミットレーベン、糸賀一雄生誕 100 周年記念出版、鳥取県立皆成学園 1968 年講義

【渡部　昭男「企画の趣旨」】

2014 年は糸賀一雄（1914-68）の生誕百年であった。昨年の大会では、「糸賀一雄生誕百年：史資料の発掘･整理･保存と糸賀一雄研究の展望」と題する自主シンポジウムを開催したが、その後、これまでの糸賀一雄研究を次なる百年に継承発展させるべく、有志で「糸賀一雄研究会」を立ち上げた。

研究会としては、一つ目には、複数領域でなされてきた糸賀一雄研究（蜂谷俊隆［2015］『糸賀一雄の研究　人と思想をめぐって』関西学院大学出版会は、①伝記的研究、②年表、③思想史研究、④教育史研究、⑤歴史社会学研究、⑥その他、に区分している）を共同的に練り上げてみたい。二つ目には、糸賀一雄ゆかりの施設・人物・地域などを実際に訪ねたい（6/14 に不問庵・一碧文庫などの見学会を実施）。三つ目には、糸賀一雄の思想と実践について関連資料の翻訳等による世界への発信を進めたい（これに関しては、渡部昭男［2015］「緒言『糸賀一雄の最後の講演—愛と共感の教育—』：中国語への仮翻訳にあたって」『教育科学論集』(18)を参照のこと／神戸大学学術成果リポジトリ Kernel より入手可能）。

本大会では、『ミットレーベン　故郷・鳥取での最期の講義』（1968 講義／2014 発行）を取り上げて、その読み解きをともに行う。なお、会場で講演録音＝糸賀一雄の肉声を披露したい（希望者には冊子を当日頒布）。

【國本　真吾「『ミットレーベン』が意味するもの」】

糸賀一雄の故郷・鳥取の地における最期の講義録として発行された『ミットレーベン』は、1968 年 1 月 18 日に鳥取県立皆成[ｶｲｾｲ]学園（倉吉市。障害児入所施設）で行われた、約 3 時間分の講義が録音されたオープンリールのテープをもとに文字化したものである。この講義で触れられている内容は、晩年の糸賀の著作等とも重なるところが多い。当時は、糸賀の代表著作『福祉の思想』(NHK 出版）の出版直前という時期でもあり、『福祉の思想』や没後に編集された『愛と共感の教育』（柏樹社）などに収められているものとも重複するものが目立つ。そして、びわこ学園の療育記録映画「夜明け前の子どもたち」の完成披露直前でもあり、糸賀思想のキーワードが講義の随所に見え隠れしている。しかし、公刊されている著作物の中では登場していないと推測される「ミットレーベン（mitleben)」という言葉は、本講義の大きな特徴でもあり、講義録の発行に際してタイトルとして採用した。糸賀が発した「ミットレーベン」という言葉は、糸賀の言葉を借りれば「ともに暮らす」という意味である。英語では“Live With”となるが、音の響きからドイツ語の「ミットレーベン」を糸賀は用いた。講義の中では、障害児のことを理解するためには、「ともに暮らす・一緒に暮らす」ことが最善の方法だという形で説いている。「ミットレーベン」の語の意味からは、近江学園が創設時に掲げた三条件（四六時中勤務、耐乏の生活、不断の研究）を想起させるところもある。また、従前からの糸賀の共感思想や発達観に迫ってきた研究や、糸賀が遺した著作などに「ミットレーベン」の言葉を重ねてみることで、新たな発見や解釈を見出す期待も生まれている。本話題提供では、講義録の特徴を解説するとともに、糸賀がいう「ミットレーベン」が意味するところを探りたい。

【冨永健太郎「ミットレーベンと教育愛—糸賀一雄最晩年の思想—】

糸賀一雄による彼の故郷、鳥取での最期の講義は、『ミットレーベン　故郷・鳥取での最期の講義』（1968 年 1 月 18 日）と題して、昨年、國本真吾氏の編集によって刊行された。

「ミットレーベン」は、國本氏の解説にあるように、「ともに暮らす」という意味で糸賀はそれを使用する。しかし、糸賀は彼が使用する「ミットレーベン」の意味を、生涯、彼の著作の中で体系的に説明することはなかった。したがって、糸賀一雄によるミットレーベンの思想を継承するには、史資料の系統的精査とその読み解きが必要となる。それでは、「ミットレーベン」は、いつ、糸賀によって使用され始めたのか。「ミットレーベン」と、糸賀が亡くなる前日に行われた滋賀県での最期の講義『糸賀一雄の最後の講義—愛と共感の教育—』（1968 年 9 月 17 日）との関係はいかなるものか。

「ミットレーベン」を糸賀が最初に使用したのは、1964（昭和 39）年、京都府立大学で行われた「福祉学原論」の講義においてであった。同講義の講義録（未刊行）のなかに、“mitleben”が出てくる。また、そこには、kanner（レオ・カナー）の名前も記されていることから、糸賀は、西田哲学が使用してきた「ミットレーベン」を、レオ・カナーを参照しながら、「精神薄弱児」教育における「かかわりの理想のかたち」へと解釈しなおしていったと考えることができる。

本報告では、滋賀県で行われた「最期の講義」に現れる「教育愛」と「ミットレーベン」との連続性を明らかにして、糸賀一雄最晩年の思想とその到達点を明らかにしたい。

（WATANABE Akio, KUNIMOTO Shingo, TOMINAGA Kentaro）